

## 若干の高句麗地方名の研究

安 炳 浩著  
呉 満訳

## 一、はじめに

朝鮮語は悠久な歴史を持っている言語である。したがって朝鮮人学者は勿論のこと、外国の学者も朝鮮語に関心を持って活発な研究を展開している。しかし、朝鮮語はまだ多くの点でさらに深い研究が必要である。特に、古代朝鮮語研究において新しい成果を収めたというけれども満足すべき結果を成したとは言い難い。その原因はいろいろな角度から考えられようが、主に次のようなことに帰すると言える。一つは、古代朝鮮語を表記し、後世に伝えた文献が欠乏しているために、当時の言語の様相を自由に分析できないという大きな隘路があることだ。二つめは、その制限された文献さえ、訓民正音のような表音文字で表記されたものでなく、吏吐文字としての漢字で表記されているということである。表意文字である漢字でもって朝鮮語を表記しているので古代にどのように読んでいたのか、ということがやはり大きな問題となる。

勿論、最近になって少なからずの学者が朝鮮漢字音に関心を抱き、深い研究を進め、ある程度の新しい成果を収めていることは誇りうることである。しかし、漢字自体は中国にて創製された文字であるため、まず古代中国の漢字音がどうであったか、ということが解明されねばならないと同時に、朝鮮語では漢字をどのように受容し、読んだのかという問題が正確に解明されねばならない。ところで、今日、中国古代漢字音の研究も充分だとは言いがたい。したがって、古代朝鮮漢字音についての研究も不十分な土台の上で進行せざるを得ないのでやはり困難であることは事実である。勿論、だからと言って古代朝鮮語の研究が何らの展望もない漠然たる状態に置かれていると主張するのでは決してない。

たとえ我々が研究した学術成果が、今日まで推定や仮説でしか取り扱われないこともあるだろうが、それらが多方面の新しい論証を経て信頼に足る確証をもたらす可能性をだれも否定しえないはずである。したがって、我々の研究活動が今のように継続、推進するとするなら古代朝鮮語についての研究もより高い段階へと発展するであろうと確信できる。

我々が古代朝鮮語を研究する時、およそ三国（高句麗・百済・新羅）時期の言語資料を取り扱うことになる。ところで、同じ資料を扱って導き出した結論が学者により同じでない場合がよく見られる。その場合、そのどの一方が正しく、他の一方が誤まっていることもある。しかし、場合によっては両方が誤っていることもある。このことは、今日、郷歌の解説に表われる状況を見ても知れよう。

今日、三国（高句麗・百済・新羅）時代の人名、地名の解説から得られた結果を見れば実に興味ある現象を発見することができる。それは、朝鮮語では、現代朝鮮語であれ中世朝鮮語であれ、既に消滅した語彙となってその痕跡を求めることができないのに、むしろ日本語においてそれに共通な語彙を求めることができるという事実である。例を挙げれば、高句麗の〈鳥斯含〉は日本語の〈うさぎ／usagi〉と対応し、高句麗語の〈密波兮〉における〈密〉は日本語の〈みつ／mitsu／〉の〈mi／〉と対応するし、高句麗語の〈内米忽〉における〈内米〉は日本語の〈ぬま／numa／〉あるいは〈なみ／nami／〉と対応し、その共通性を論証している。

勿論、このような具体的な論証は学者によって見解が完全に同じではないにしても、古代朝鮮語の一部の語彙が日本語の語彙と一致するという事実については誰も完全に否定しえないで

あろう。

古代朝鮮語の若干の語彙が日本語と一致する現象は以上のごとく易く求めることができるが、他の言語との関係はどうであろうか？ これは朝鮮語の系統論の問題の研究上、はなはだ重要な位置を占める問題の一つである。実際、朝鮮は地理的に日本とだけ隣接しているのではなく、その外にも中国北方の多くの民族とも隣り合わせに生きてきたし、また彼らの言語は構造的側面上、漢語とは異なり朝鮮語と極めて近似している。ただ、残念なのは、少なからずの北方民族が他民族に同化され自己の言語を喪失したり、文字がなく自分たちの言語を記録した歴史的資料を探し求められないことだ。したがって、このような言語を古代朝鮮語と比較してみることは、非常に興味のあることであるけれども、また非常に困難なことでもある。ゆえに、本稿では、ただ高句麗の地名表記で理解しがたい一部の語彙を蒙古語と比較して、高句麗の一部の語彙が蒙古語の語彙と共通性を持っていることを明らかにすると同時に、古代朝鮮語の若干の特性を明らかにしようと思う。

## 二、若干の高句麗地名の分析

### (1) 富平郡本高句麗夫如郡 景德王改名 今金化県

高句麗時代の〈夫如〉なる地名が新羅時代には〈富平〉となっており、高麗時代には〈金化〉となっている。だとすれば、高句麗時代の〈夫如〉をどのように理解しなければならないのか？

まず初めに、一部の学者たちの解説を調べてみると、柳 烈氏は、“三国時代の吏吐についての研究”で、〈夫如〉を／bona／、／buna／と解説し、俞昌均氏は、“韓国古代漢字音の研究”で〈夫如〉を／bēr-nar／と解説した。

以上の解説を検証すると、〈夫如〉を現代朝鮮漢字音で読んでいない点では同じであるが、一方では、／bona／、／buna／に、もう一方では、／bēr-nar／とそれぞれ異なった解説をしている。

そこで、なぜこのように全く同じ漢字を互い

に異なる読み方をするのか、が問題となる。

これはまさに、古代朝鮮漢字音をどのように推定して読むのかにおいて相互異なる見解を示していることに帰着する。

漢字〈夫〉は、中国漢字音において、魚韻、並母、平声、合三となり、／b<sub>i</sub>ua→b<sub>i</sub>uo→b<sub>i</sub>uo→b<sub>i</sub>u／のごとく上古から中古にかけて変化した（註、ここで応用した中国上古および中古漢字音は王 力氏の『漢語語韻史』から引用したものである）。

中国漢字〈夫〉の表音を分析してみれば、語頭子音は有声音／b／になっている。ところが、先の解説者たちの見解は有声音として取り扱わず無声音／p／として解説し、他の一方では、有声音／b／として取り扱っている。これは古代朝鮮語の音韻体系をどのように理解するのかから生じた問題である。現代朝鮮語や中世朝鮮語では無声音と有声音が音韻論的对立の機能を果さない条件下から古代朝鮮語においてもそうであったらうと推定して判断すれば、無声音／p／にしかなり得ない。勿論、この問題はさらに引き続き研究すべき問題である。

漢字〈夫〉の母音は、上古、中古の中国音では、／i<sub>u</sub>a→i<sub>u</sub>o→i<sub>u</sub>o／のように全て二重母音になっている。高句麗の母音では、／o, u, ə／などと単母音として取り扱い解説している。これもやはり古代朝鮮語に二重母音がなかったと見る前提の下でのみ可能な解説である。筆者も単母音／o／と推定して〈夫〉を／po／ないし／bo／と読むことにする。

漢字〈如〉は、魚韻、日母、平声、開三として／n<sub>i</sub>a→n<sub>i</sub>o→n<sub>i</sub>o→r<sub>i</sub>u／のごとく上古から中古にかけて変化したと考える。ところで、既述の解説者たちは、漢語の日母を高句麗時代に／n／として受容したと見ている。現代朝鮮語でもそうであるが、朝鮮語の語韻体系において日母を発音できない状況から漢語の日母に接近した子音／n／に対応させてみる見解であるが、これは合理的であると考えられる。〈如〉字の母音は上古、中古では、／i<sub>a</sub>→i<sub>o</sub>→i<sub>o</sub>→i<sub>u</sub>／のごとく変化した。先の解説者たちは、単母音／a／と／i／に接収したと推定した。筆者は、主要母音となっている／a／や／o／として受け入れ

たとえる。ゆえに、高句麗の地名〈夫如〉は／pona／と判断するのが妥当だと考える。

それでは、／pona／は高句麗時代にどのような意味をもった語であったか？

この問題を解明しようとすれば、新羅時代に改名された〈富平〉と関連づけて考察せざるを得ない。実際、高句麗の〈夫如〉はまさに新羅時代に改称された〈富平〉の〈富〉と同じ意味だと考える。それは、蒙古語で“福裕だ”や“福がある”は／poian／と言うのであるが、この発音はまさに高句麗の〈夫如〉／pona／と接近しているためである。勿論、これは偶然の一致ではないかと疑うこともできる。しかし、単純にそのように取り扱うのは困難である。なぜなら、ただこの一つの語彙にだけ共通性を発見するのではなく、その他の所でもこのような特性を発見し得るし、地理的には極めて隣接しながら暮らしてきたことを考慮する時、偶然の一致で処理し切れないうと思う。これが、共同始祖語から一致するのか、さもなければ、その一方から他の一方の言語を借用したものなのか、将来さらに研究する必要があるだろうが、当時、〈富〉という意味が蒙古語と高句麗とで一致したということ立証するにはこれで充分だと言えよう。

(2) 松山県 本高句麗夫斯達県 景得王改名今未詳。

高句麗時代の地名、夫斯達／pusadal／を後世の新羅時代には松山／songsan／と改めて呼んだ。こうして〈夫斯達〉は固有の純粋な高句麗語であり、〈松山〉は漢字語彙に改称されたものであることが分かる。ところで柳烈氏は、〈夫斯達〉を／posidala／と解説しつつ／posi／は松の意味で、／dala／は山の意味だと解した。また、俞昌均氏は、／päsär-dal／と読み、／päsär／は松の意であり、／dal／は山であると解した。たとえ両者が解説において若干の相異があろうとも〈夫斯達〉を古代朝鮮漢字音で読んだ点では互いに一致する。

次に、上古、中古の中国漢字音ではどのように推定しうるのかを考察してみよう。

漢字〈夫〉は、魚韻、並母、平声、合三から

成り、／bja→bjuo→bjio→bjü／のように変化した。ここで語頭子音／b／を高句麗語では／p／音で受け入れたという見解は一致する。母音においては、／jua→juo→jio→jü／をおおの単母音／o／と／ä／に異なつて推定している。筆者は、高句麗の漢字語は遅くとも南北朝以前に受容したものと認める立場から／o／と読んだものと考え。従つて、漢字〈夫〉は、／po／惑いは／bo／にならなければならないと思う。

漢字〈斯〉は、支韻、心母、平声、開三から成り、／sje→si／と上古から中古へと変化したのであるが、これは高句麗時代の朝鮮漢字音ではどのように発音されたのであろうか。

語頭子音／s／は高句麗時代に自由に発音できたと判断されるので、筆者は既述の解読者たちが推定した／s／に同意する。母音においては、／je→i／のような変化を示しているが、これをそれぞれ／i／と／ä／に相異つて推定している。筆者は中国の上古漢字音の主要母音である／e／に依拠して／e／に近い／ə／で受け入れたと推定する。このように考えれば、高句麗の〈夫斯〉は、／posə／や／bosə／になり得る。

漢字〈達〉は、月韻、定母、入声、開一から成り、／dax→dai／のように上古から中古にかけて変化した。即ち、中国漢字音から考えれば、語頭子音が有声音／d／になっている。ところで、柳烈氏は、／t／と推定し、俞昌均氏は、／d／と推定している。これは古代朝鮮語の語音体系において有声音があつたのか、なかつたのかに従つて結論が異なってくる問題である。筆者はまず、有声音として受容したと考え、／d／として取り扱う。母音においては、／a→ai／のように変化を示すが、高句麗では、／a／として受容したと判断する。また、語末子音／t／に対して、朝鮮の学者たちは、みんな／l／で対応させて解説している。ただ、柳烈氏は高句麗時代に語末子音を発音できなかったと判断したので、母音／a／を添加して／la／と読んだことで違いが生じたものである。筆者は、上古中国漢字音の特性を考慮しながら音節末の子音の発音を回避する古代朝鮮語の特性を

考慮して／da／と読まなければならないと考える。したがって、高句麗の地名〈夫斯達〉は／posədada／であろう。勿論、／dada／は／dala／に変わり、再び／dal／に変化して今日に至っている。今も、／nop-ta／（高い）や／san／（山）と関連した語彙構成において／yangdal／とか／imdai／という語があるが、これは古代朝鮮語の〈達〉と関連すると思う。だとすれば、〈夫斯〉はどのように理解しなければならないのか？ 新羅時代に改名された漢字は〈松〉である。〈松〉は中世朝鮮語では／sɔl／であり、現代朝鮮語では／sol／である。したがって高句麗の〈夫斯〉を／sɔl／や／sol／と関係づけるとするなら、発音上の相異が歴然としており相互同じであるとは言い難い。筆者は、蒙古語の／hosi／と関係づけてみた。勿論、こうなれば蒙古語の語頭子音／h／が朝鮮語の／pɒ／と対応関係を成していることを設定しなければならないであろう。朝鮮語の／pal／（足）を蒙古では／hul／、朝鮮語の／pom／（春）を蒙古語では／habar／などと発音するのであるが、これらは／h／と／p／の関係に、充分に関係づけることができよう。ゆえに、高句麗語の〈夫斯〉は／sol／（松）と関連するのではなく、蒙古語の／hosi／と共通性がある語であると判断する。高句麗では、〈松〉の意味で〈夫斯〉とのみ表記したのでなく、〈扶蘇〉とも表記したところもある。

### (3) 深川県—云伏斯実

高句麗の地名〈深川〉については、〈伏斯実〉とも称すると表記してある。〈深川〉と言うのは漢字語彙であろうし、〈伏斯実〉と称するのは、即ち高句麗の固有語彙で表記されたものである。

では、まず他の学者たちがこの〈伏斯実〉をどのように分析したのかを考察してみよう。

柳 烈氏は、『三国時代の吏吐についての研究』において、／posima／、／pusima／と読みつつ、／posi∞pusi／は“深い”という高句麗語で、／ma／は〈川〉に対する高句麗語だと判断した。また、俞昌均氏は、『韓国古代漢字音の研究』において、／pəksərmər／と読みながら、

／pəksər／は／kiphi／（「深い」の語尾）という語であり、／mər／は〈水〉の語であるとして／pəksər／は／pəsər／となり〈深い〉の意を持っているが、後世の朝鮮語とは合わなく、日本語の／Fuka-／に対応するものだと判断した。

だとすれば、上古、中古の中国漢字音はどうであったかを次に考察してみよう。

漢字〈伏〉は、職韻、并母、入声、合三から／bɨuk→bɨok→bɨuk／のように変化している。したがって筆者は、語頭子音を／p／ではなく有声音と認める。母音においては主要母音である／u／を借用することができる。音節末の子音／k／は古代朝鮮語の音節構成の特性に随いが／gə／と読める。即ち、漢字〈伏〉は／bugə／のように処理しなければならないと思う。

漢字〈斯〉は、支韻、心母、平声、開三から成り、／sɨe→si／に変化した。筆者は、語頭子音／s／を高句麗時代にはそのまま読めたとし、母音においては漢語の／e／に接近する／ə／で借用したと判断する。ゆえに、漢字〈斯〉は／sə／に、伏斯は／bugəsə／と判断するのが妥当だと考える。ところで、〈伏斯〉／bugəsə／は後世の朝鮮語／kiphi／とは発音上著しく異なり、同じものだとは言い難い。また、日本語の／Fuka／とはある程度関係づけられるが、これより更に接近し得るのは蒙古語の／bugəsin／（底部、後部）である。勿論、意味上も〈低い〉とか〈後〉となっているところからさほどの違いはない。実際上は、低いことと後部は〈深い〉ことと密接な関係があるとみななければならないであろう。

漢字〈実〉は、支韻、明母、上声、開二から成り、／me→meai→mai／のように変化した。したがって語頭子音は／m／をそのまま借用することができるし、母音においては、／e／に接近した／ə／に借用した可能性が濃厚である。したがって、〈実〉は／mə／と読むことができ、これは中世朝鮮語の／mil／（水）や現代朝鮮語の／mul／（水）と関係する語だと見ることができる。実際、高句麗においても〈実〉は〈川〉とだけ関係するのではなく、〈水〉／mul／とも通用していることや、高句麗の地名〈水谷城〉を〈実晷忽〉と表記していることから充分に



知ることができる。

#### (4) 猪足県—云烏斯廻

高句麗時代の地名〈猪足県〉を別名〈烏斯廻〉とも呼ぶ、と表記されている。ここで〈猪足〉は漢字語彙であり、〈烏斯廻〉は固有語彙であることが知れる。

次に、他の学者がこの地名についてどのように解説しているか概観してみよう。

柳 烈氏は、『三国史記の吏吐についての研究』で、〈烏〉は誤字と見て〈鳥〉に改め／tosi／とし、読み／tol-da／と関係づけて／tali／とした。また、俞昌均氏は『韓国古代漢字音の研究』では、／əsər-ɣar／と判断し〈烏斯〉は即ち〈獺〉で／oseli／の意味であり、／ɣar／は／kale／kal／で〈足〉のような意だと解釈した。そう説きつつこれは中期朝鮮語の／pal／（足）とは合わないと言った。

では、上古、中古の中国漢字音ではどのように読んだのかを次に見てみよう。

漢字〈烏〉は、魚韻、影母、平声、開一からなり、／ʔa→a→ɔ→o／のごとく変化した。したがって高句麗では／o／で受容した可能性が濃厚である。

漢字〈鳥〉は、幽韻、端母、上声、合四からなり、／tiu→tio→tiou→tiæu／のごとく変化した。したがって語頭子音／t／は高句麗時代にもそのまま読めたものと考えられる。母音は二重母音で／iu→io／のごとくなるが、単母音／o／で受容したと思われる。こう考えると／to／になる。

漢字〈斯〉は、支韻、心母、平声、開三からなり、／sie→si／に変化したものであるが高句麗時代には／sə／と読んだ。

漢字〈廻(回)〉は、微韻、匣母、平声、合一から／ɣuəi→ɣuəi→ɣuai／と変化した。したがって高句麗時代に語頭子音／ɣ／を自由に発音できたし、母音は三重母音を単母音化して／a／と発音したと思われる。

ここで、漢字〈烏〉と〈鳥〉はどちらが正しいのかということが問題となる。しかし、漢字語彙〈猪〉と関係づけて考えれば〈鳥〉と読む

より〈鳥〉と考える方が朝鮮語の／toth／により近い。したがって〈烏斯〉は／tosə→tos／と考えたい。

次に〈廻(回)〉について考察してみよう。これは、／ɣa→həl／から漢字語〈足〉と関係づけねばならない問題である。ところで、〈廻(回)〉の意味を／tol-da／（回る）と断じた後、再び朝鮮語の／toli／（足）と関係づけるのは推定上あまりにも無理があるように思われる。筆者は、高句麗語の〈廻〉を／ɣə／から／həl／に推定すると同時に、これを蒙古語の／hul／（足）と関係づけてみた。また、〈足〉を高句麗語の／ɣə→hul／である、と判断するならば中世朝鮮語と現代朝鮮語において〈足〉と密接な関係があると考えることができる。即ち、語頭子音における／h→p／の変化を推測することになる。

#### (5) 阿珍押県—云窮嶽

高句麗の地名〈阿珍押県〉を別称〈窮嶽〉とも称すると表記されている。ここでも〈窮嶽〉は漢字語彙であり、〈阿珍押〉は固有語彙であろう。

次に、この高句麗地名についての他の学者の解説を概観してみよう。

柳 烈氏は、『三国時代の吏吐についての研究』で、〈阿珍押〉を／adalanu／と解し、／adala／は〈窮〉なる意に解することができるが、明確でなく、〈押〉は／noɔnu／で〈嶽〉の意味だとした。俞昌均氏は『韓国古代漢字音の研究』で、〈阿珍押〉を／atar-ɣaq／と解説し、〈阿珍〉が〈窮〉に該当し〈珍〉は元来地名の接尾辞であったものか、判断しがたいとした。結局、両者は自信のない判断を下したに過ぎない。

では、これらの漢字が上古、中古の中国漢字音ではどうであったか概観してみよう。

漢字〈阿〉は、歌韻、影母、平声、開一から成り、／ʔai→a→ɔ／と変化した。ゆえに、漢字〈阿〉は高句麗時代に／a／と受容し得た。漢字〈珍〉は、真韻、端母、平声、開三から成り、／tien→tin／と変化した。したがって、語頭子音／t／は高句麗時代にそのまま受け入れ／t／と読み得るし、母音は、／je／から／ə／と

して受け入れ単母音化し、/tə→ta/と読める。終声子音/n/は音節化して/nə→na/となり得る。

それでは高句麗時代の〈阿珍〉/atana/はいかなる意味を有していたのであろうか？ 勿論これは改称された漢字語彙〈穷〉と密接な関係を有していたに違いない。ところで、〈穷〉は後世の朝鮮語では〈貧しい〉〈窮する〉の意で多く使われた。したがって、高句麗時代の〈阿珍〉/atana/とは直接的に関係づけることはできない。筆者は、高句麗語〈阿珍〉/atana/を蒙古語の/jatah/〈貧しい〉と同一だと考える。何故なら語頭母音と二音節目の母音と子音が高句麗語と蒙古語が一致するためである。

漢字〈押〉は、緝韻、影母、入声、開二から成り、/?eap→eap→ap/のごとく変化した。現代朝鮮語の漢字音では/ap/となるが、高句麗時代には果してどのように発音していたのが問題である。筆者は、中国漢字音の影母と匣母が朝鮮漢字音において混用する特性を考慮して、影母の/?/を匣母の/ɣ/で対応させ/ɣapa/として受け入れたと推察する。このように考えていくと、蒙古語の/ɣabaha/〈夾子〉と/habts'i/〈峽〉と関係づけて、その共通性を探り得ることになる。

### 三、むすび

以上、高句麗のいくつかの地名について考察してみた。たとえ分析された地名が多くはないにしても、これを通じて次のようないくつかの問題を指摘することができる。

一つは、今日、我々が扱っている古代朝鮮語の主要な研究方法は大体において中世朝鮮語から古代朝鮮語に遡りながら我々の研究事業を推進するものである。しかし、この一つの方法論だけでは古代朝鮮語の全貌を明らかにすることはできない。特に、変化しやすい多くの語彙的側面ではなおさらである。古代朝鮮語では活発に使われた語彙も中世朝鮮語では全くその痕跡を求めることができないものが多い。したがって、歴史的に隣り合わさって暮らしていた他の種族たちの言語と比較研究するのが極めて必要

であり、これによって、ひとつの言語内部では到底解決しえないことを容易に解釈しえるであろう。

二つめは、古代朝鮮語の語音体系をいかに正確に推定するのかという問題は極めて重要な問題の一つである。古代朝鮮漢字音に対する研究を前提にしなければ、そのいかなる推定も正確な結論に到達することはできない。なぜなら、古代朝鮮語の文献資料の全てが漢字で表記されているため、漢字に対する研究を離れてはいかなる推定も仮説にとどまるしかないためである。

三つめは、古代朝鮮語の文献資料が漢字で表記されたものであるのは事実であるけれども、これは中国漢字と全く同じものではない。古代の朝鮮人は中国の漢字を借用し、朝鮮語の特性にしたがい吏吐という独特な字体の書写体系を創造した。したがって、中国漢字音とは異なることは勿論、全てを朝鮮漢字音で解読しても解決しない。

(1989年12月脱稿)

(訳者あとがき)

1988年8月24日から28日までの期間、「第2次朝鮮学国際学術討論会」(以下「学術討論会」と略称)が中国、北京大学にて開催された。

この学術討論会には、世界各国の朝鮮学研究機関と学者間との連携を強化し、朝鮮学研究成果と学術情報を交流し、朝鮮学の研究事業を推進するため……朝鮮、日本、中国、米国、ソ連、カナダ、フランス、ドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国、チェコスロバキヤ、デンマークなど世界の12ヶ国から300余名の学者たちが参加した。

そして、この学術討論会では、言語、文学、歴史、経済、社会、法律、哲学、地理、宗教、民俗、教育、体育など朝鮮学の諸般の領域を含んだ140余編の論文が発表された(「第2次朝鮮学国際学術討論会論文集」のまえがきを参照)。

本論文は、当初、北京で発行された「学術討論会」の要旨集の中から『若干の高句麗地方名の研究』と題する安炳浩教授(北京大学)の原稿原文を日本語訳して「アジア研究所年報」第

1号に掲載する予定であったが、後日、1989年12月初め、北京大学より「第2次朝鮮学国際学術討論会論文集」が本学に送付されてきたので、再び、要旨でない著者の論文全文を筆者が日本語文に改めたものである。

論文の日本語訳出に当たっては、できるだけ著者の意と使われる用語を改めないように心がけたことを断っておきたい。

本文中に著者が論述しているように、従来、高句麗地方名に関しては学者間で異論のあるところである。

筆者による本拙訳が朝鮮語学者はもとより言語学者の参考に供していただければ幸甚である。